

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部社会学専修 4年 近藤遥香

①学習成果

今回の研修では、自分が生きてきた社会ではあまり直接見ることのなかった現状を知り、それを見たからには人に伝なければならないという義務を感じました。国際子ども学校で出会ったフィリピンルーツの子どもたちはとても明るくにぎやかで、素直でした。中には、在留資格が無かったり、日本語が分からなかったりする子もいましたが、そういった資格やルーツに制限されず、子どもたちはみんなで楽しく過ごしていました。

また、フィリピンパブで働く女性たちは、想像とは裏腹にとってもいきいきして見えたのが印象的でした。お店の中で一番若い女性は20代前半で、フィリピンから来たばかりでまだ日本語が分かっていない様子でした。彼女が何の事情でどのようなビザで日本に働きに来ているのかわかりませんが、熱心に仕事に取り組んでいると感じられました。そしてその奥では、日本人の中高年男性が、別のフィリピン人女性の膝に足を投げ出し、マッサージをさせていました。純粋な瞳で働いている同年代の彼女は、日本人の男性から性的に消費されるということを理解しているのでしょうか。

ホームレス支援の聞き取りでは、役所の窓口で嘘をつかれて追い返されたり、たらいまわしにされたり、野宿中に暴行に遭ったりするという話を聞きました。人がホームレス状態になってしまうまでの経緯についてもいくつか具体的な話を聞くことができました。

フィリピンルーツの子どもも、パブで働くフィリピン人女性も、ホームレス状態の人たちも、対等な人としての扱いがなされていません。人権が軽視されていることが根本的な問題であると考えますが、今回の例のような社会の周縁に追いやられる人達の背景や対応について、大学生になって初めて知った部分が大きいです。福祉や人権についての教育が不足していることで、社会的に弱い立場にある人たちを社会から切り離すことに繋がっていると考えます。今回の研修で自身が知った現状を人に伝えていくことは、微力ではありつつも、続けていかなければならないと強く感じました。

②海外での経験

現在は海外での経験はありませんが、卒業研究のために関わってきたフィリピンルーツの方々の背景を知るために、フィリピンに行ってみたいと考えています。

③プログラム内容

一日目には、主にフィリピンルーツを持つ子供のための学校である、国際子ども学校へ見学に行きました。授業の一コマを学生で担当することになり、年齢や日本語の理解度が様々である子供たちが参加できるように、京都についての選択式クイズを用意し、子供たちに参加してもらいました。夜は、フィリピン料理を食べたあと、フィリピンパブに行きました。フィリピンパブでは、フィリピン人の女性に接客してもらい、様々な話を聞くことができました。二日目の午前は都合により参加できず、午後のみ参加となりました。午後には、ホームレス支援を行っている方の話を聞きました。その方は、ホームレス支援をするために自身もホームレスになるという選択をしたそうです。生活保護の受給の難点や、ホームレスの方の生活の困難などのお話を聞きました。

④進路への影響について

公務員として働くことが決まっており、学生時代にはコミュニティやボランティアという立場で行ってきた支援を、今後行政の立場として行っていくことになります。大学生のうちに、社会的に困窮している当事者の話を聞いたり、活動に参加したりしたことは、大きなアドバンテージになるだろうと思います。どのような属性であっても、全員が一人の人として生きていと学ぶことができたのは、非常に良い経験となりました。